

パネル討論会

地域の歴史・文化と観光

- 司 会 松水 征夫（広島大学経済学部教授，
地域経済研究センター長）
- 発言者 中山 修一（広島大学大学院国際協力研究科教授，
地域経済研究センター研究員）
- 奥村 武久（道後温泉旅館協同組合理事長，
（有）大和屋本店旅館代表取締役社長）
- 白幡洋三郎（国際日本文化研究センター教授）
- 斎藤 潤（株）日本交通公社出版事業局編集一部編集長）
- 助言者 端 信行（国立民族学博物館教授，第二研究部長）

第9回研究集会「地域の歴史・文化と観光」



地域の歴史・文化と観光

1. はじめに : 文化経済の時代に地域連携を考える

松水：私ども地域経済研究センターは、これまで樺本先生（現、広島市立大学教授）が7年間にわたってセンター長を続けてこられ、どちらかという地域開発あるいは産業構造の問題について研究を続けてきました。それから「札仙広福」という言葉に代表されるように、地方中枢都市の連携をどうするかという研究に取り組んで来たわけです。今年は「地域の歴史・文化と観光」というテーマで、少し方向を変えたのかなという感じを持た



れた方もおられるのではないかと思います、目的とするところは一緒です。地域活性化のためにはどうすればいいのかということで、今回は歴史とか文化とか、あまり県境にとらわれない、地域連携を進めやすい分野から話を解きほぐしていった、それを最終的には経済とか政治、あるいは行政の分野での連携につなげる方向を検討し、議論の材料を提供するというところでお願いをしたわけです。

先ほどは、端先生に非常に示唆に富んだ、とても参考になるお話をしていただきました。これからの「文化の時代」、あるいは「情報の時代」ということを踏まえて、それぞれの地域が価値観を競う、個性を競うという時代に入っていくのだろーと思います。そういうことになると、いろんな価値観がありますから、地域づくりをどうするかは非常に難しい問題になってくるのだろーと思いますが、観光の分野ですと比較的皆様方のご理解がいただけるのではないかと思います。今日は観光を手始めに、基調講演のなかにあった文化経済の時代を乗り切るためには、この中国四国地域がどのような連携を持った方がいいのか、あるいは関西地区や九州地区との連携をどのように進めていけばいいのかについて議論を進めて行きたいと思います。

当地域は特徴がはっきりしないということで、中央からご覧いただく場合に中国四国地域は何を考えているのか、どういう方向に向かっているのかというご意見をいただく機会があるようですが、特徴づけをはっきりさせたいということから、本日は関西方面から白幡先生や端先生にも加わっていただいています。関西の方から見た中国四国地域はどのように映っているのか、当地域としてどういうことに力を入れたらいいのかという観点でご助言をいただきたいと思います。またJTBの斎藤さんには全国展開の

中で、この中国四国地域がどのような位置づけになっているのかということをお話いただければと思っています。

このパネル討論を開催するに当たりまして、私自身はあまり観光の面で知識がないものですから、書店に行きまして、この地域が観光旅行情報誌の中でどういう取り扱いになっているのかを調べてきました。今日はJTBの方が来られるということで『るるぶ』という雑誌を持ってきました。ご覧になった方もおられるかと思いますが、山陰と山陽の観光資源を如何にネットワークで結び付けるかを紹介した本です。このなかに中国四国地域の街道案内というのがありまして、鉄の道とか銀の道、芸術と文化街道、万葉街道、古代史街道、瀬戸内文化街道、出雲街道、トワイライト街道、海峡夕日ラインとか、中国地域の持てる観光資源をネットワークで結ぶと、いかなるラインができるかというような他の情報誌や他の地域にはないものが載っています。全国から人を呼ぶという場合に、一か所だけですとどうしても力が弱くなるのですが、1泊だけでなく2泊、3泊してもらうためには、いろんな資源を持っている所が連携してネットワークをつくる必要があるのではないかという感じがしました。

このガイドブックは、中国産業活性化センターの調査研究の成果物として発行された物のようです。今回お出ましいただいたパネリストの中には、こうした情報誌をつくる提言をされた中山先生と、情報誌を発行しておられるJTBの「るるぶ」編集長に来ていただくことになりました。我々としてもちょっとびっくりしてしまっていて、こういうつながりができるとは夢にも思わなかったわけです。そのあたりの事情も含めて、とくに文化の時代、個性の発揮を求められている時代、価値観の多様化している時代に、当地域を売り出すためにはどうすればいいかということ、最終的にまとめていくことができればと思っています。

では最初に、中山先生には、中国四国地域から見たネットワーク、観光資源を如何にして活かせばいいかということで、以前に実施された調査の結果を踏まえて当地域の進むべき方向をご提案いただければと思います。

2. 中国地域観光活性化のための提案

中山：私の本日の役割は、おそらく地域の歴史や文化というものを、観光産業の発展にどのように結び付けていけばいいのかについて、中国地域の観光ネットワーク構想という調査研究に93年度、95年度とかかわってききましたので、その成果を踏まえた考えを述べるのが役回りだろうと思います。

中国地域の観光活性化の観点から3点ほど提案してみたいことがあります。



一つはエコツーリズムあるいはグリーンツーリズムと言われるもので、これは今後、中国地方の活性化を考える場合の一つの材料になるのではないかと思います。もう一つは観光ボランティアガイドの制度をもっと活性化すべきということです。そして3点目が観光案内手法の見直しです。これまでの日本の観光案内は、まだ外国に比べると遅れているのではないかと強い認識を持っていますので、そのあたりの手法を見直す必要があるのではないかとことです。

この3点は、とくに今回、この8月にオランダで学会がありまして、エクスカーショでオランダの農村を見てきました。中国地域の広島に住んでいるわけですから、こういう所で観光の活性化というのは何かを重ね合わせて見ていましたら、先ほど申しました3点、つまりエコツーリズム、ボランティアガイドそして観光インフォメーションセンターは、オランダのどこの田舎に行ってみても、日本では考えられないようなまいシステムとして機能していることに感動しまして、今後、日本でも大いに力を入れて考える点であろうと思ったわけです。

そういう前提で、そもそもこの中国地域の観光ネットワーク構想ですが、すでに中国産業活性化センターから報告書が出ています。こういうことを中国地方でやろうというきっかけは、単純なきっかけなのですが、東京の人に会って話をすると、とにかく中国地方に行こうと思ってもさっぱり分からないということです。関東に住んでいると中国地方の何処にどう行けば何があるのかという情報が全く欠けているということを強く言われます。これは何とかしなければいけないということで、こういうプロジェクトを組んで、もっと中国地方以外の地域に住んでいる方々に、とりわけ関西・関東地区の方々に中国地方をどうやって廻ったら、どういうネットワークを想定しておいでいただくと、有効に時間を費やしていただけるか、ということを考えようと始まったプロジェクトです。

通常ですとこういうプロジェクトは、研究報告書を出して終わりということですが、広く一般に紹介するようなものに仕上げないと、観光研究をやった意味がないということになって、そこで先ほどご紹介いただいた『るぶ山陰・山陽・中国』として世に登場したわけです。これは中国地域の民間と行政の方々が一緒になって委員会をつくって、中国地域の観光のあり方を考えて、それをベースにつくってもらったものです。もちろん商業ベースでつくるわけですからいろいろ限界はありますが、研究成果を踏まえて作成する方式で、一つの観光のあり方を考えたという意味では、全国的にも特異であったといえます。JTBの編集の方々にとりましても、こういう例は初めてだったものですから、さらにいろんなご無理もお願いしたこともあって大変でした。しかし、出来上がった成果としては、地域のお役に立っているのではないかとと思っています。

ここで、中国5県の84年から94年の10年間の観光客の総入込数の変化を見てみますと、広島は緩やかな増加で、岡山は停滞気味です。鳥取は絶対数は少ないのですが非常に停滞的です。一方で九州を見ますと、非常に元気がいいわけです。吉野ヶ里遺跡の発掘後

に急激に伸びてきたとか、元気のいい県があるということで非常に特徴的です。熊本にしても阿蘇を持っていますし、鹿児島には桜島があるし、いろんな特徴があります。四国は、愛媛がずっと停滞気味ですが、香川が非常に跋行的といいますか、かなり乱降下しています。高知・徳島は絶対数も少なくても停滞的であるというように、大まかな傾向がみられます。四国に比べれば中国地方には上向きの所はありますが、九州に比べると格段の差で伸びが小さいことが分かります。

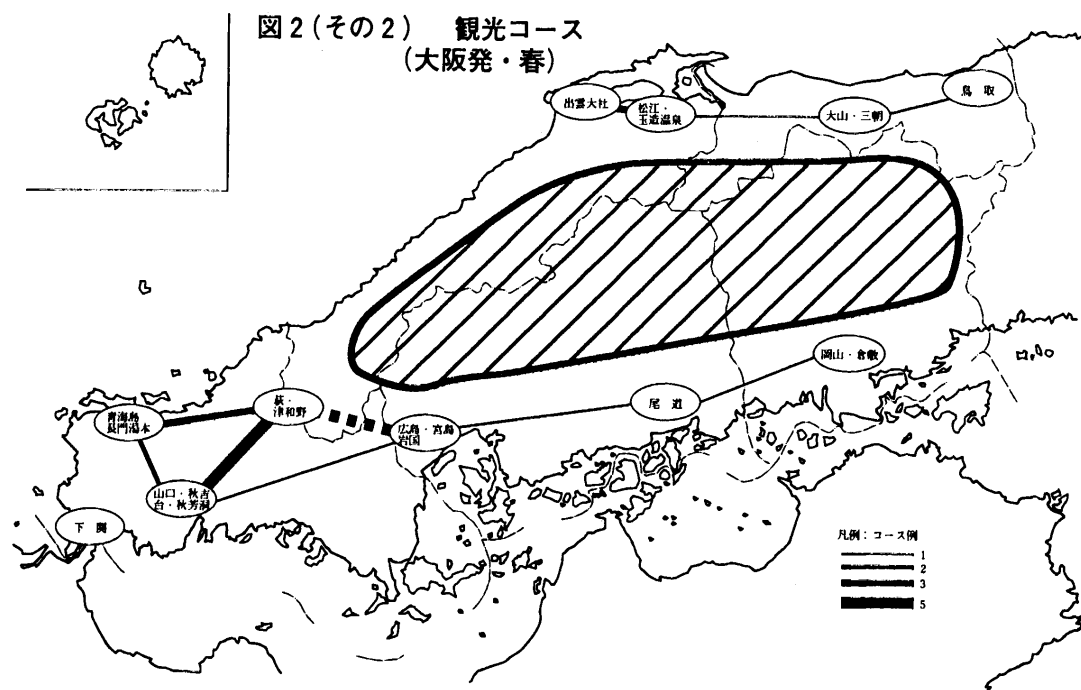
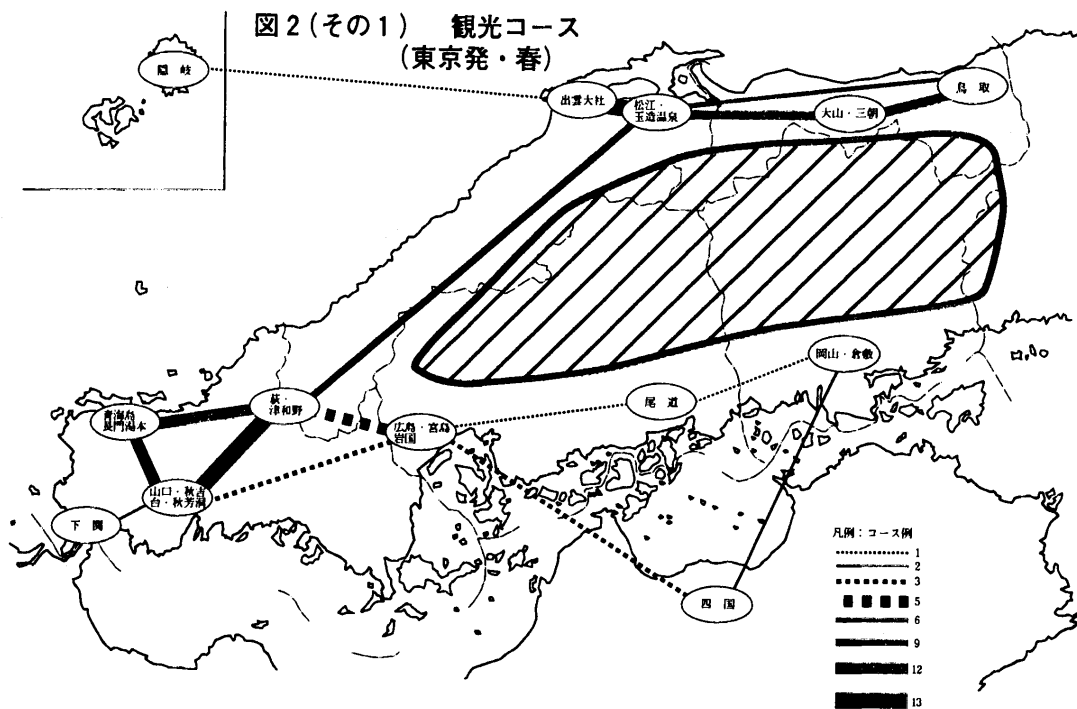
そこで我々の調査研究の成果ですが、こういうルートをつくっています（図1参照）。これをよくご覧いただくと、山陰と山陽を結ぶ適切なものがないのです。実際に見るべき所は山陰から山に入って一旦向こうに戻るとか、そうでないとうまくつながらないということで、これは中国地方の大きな問題点です。つまりネットワークを考えてみますと、山陰と山陽という太い線のところが一番魅力的であろうということで引っ張ってある結果です。上の図が観光コースで、東京発で中国地方に来た場合にどこに降りてもらうかという図で、山陰に降りた場合です。大阪発の場合にはむしろ下の図の方がネットワークがいいのではないかとということで、大阪発のお客様は下の方で、東京発のお客様は上の方というルートで設定しました（図2参照）。ところがここに空白域が真ん中にできてしまうのです。いわゆる観光資源のエアポケットと言ってもいいような部分ができるわけです。

それでは何故空白域ができるのかというのがこの図です（図3、図4参照）。人文資源を地図に落としてみますと、山間内陸部に空白の地域ができてきます。自然資源をみると若干中国道沿いに一部、岡山県の西の方や広島県の東の方にありますが、やはり大きな空白地域ができてしまいます。ここをどうするかというのは、中国地域の観光開発にとりまして大きな課題になるだろうと思っているわけです。その結果として、市町村別の宿泊収容力の分布をみると、内陸部には観光資源がないわけですから、当然宿泊施設も育たないということになっています（図5参照）。私どもとしては、中国地域はこういう状況にあるということを、今後、観光を考える上で理解しておく必要があるのではないかと考えています。

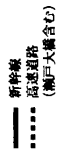
それで結局、観光産業の振興のために何を考えたらいいかというと、基調講演の端先生のお話にもありましたが、これまでの価値の同一化指向社会から、価値の多様化指向社会へと転換するという認識は大事だろうと思います。それでどうなるかと言いますと、結局、観光資源の新たな創造を考える必要があり、中国地域においてはその目玉として、エコツーリズムあるいはエコミュージアムの提案があります。これはどういうことかと言いますと、すでに60年代にフランスでジョルジュ・アンリ・リベールという人が提唱していることが、これからの日本で活かされるのだろうと思います。何故かという、今、小学校で生活科という環境を勉強する科目が入っています。これを活かす道をどの学校でも先生方が困っています。これに対応するような施設を各市町村レベルでつくってもらおう。これは非常に有効です。オランダの田舎に行きました時に、民間の人

[illegible]

中国産業活性化センター、P.67より。

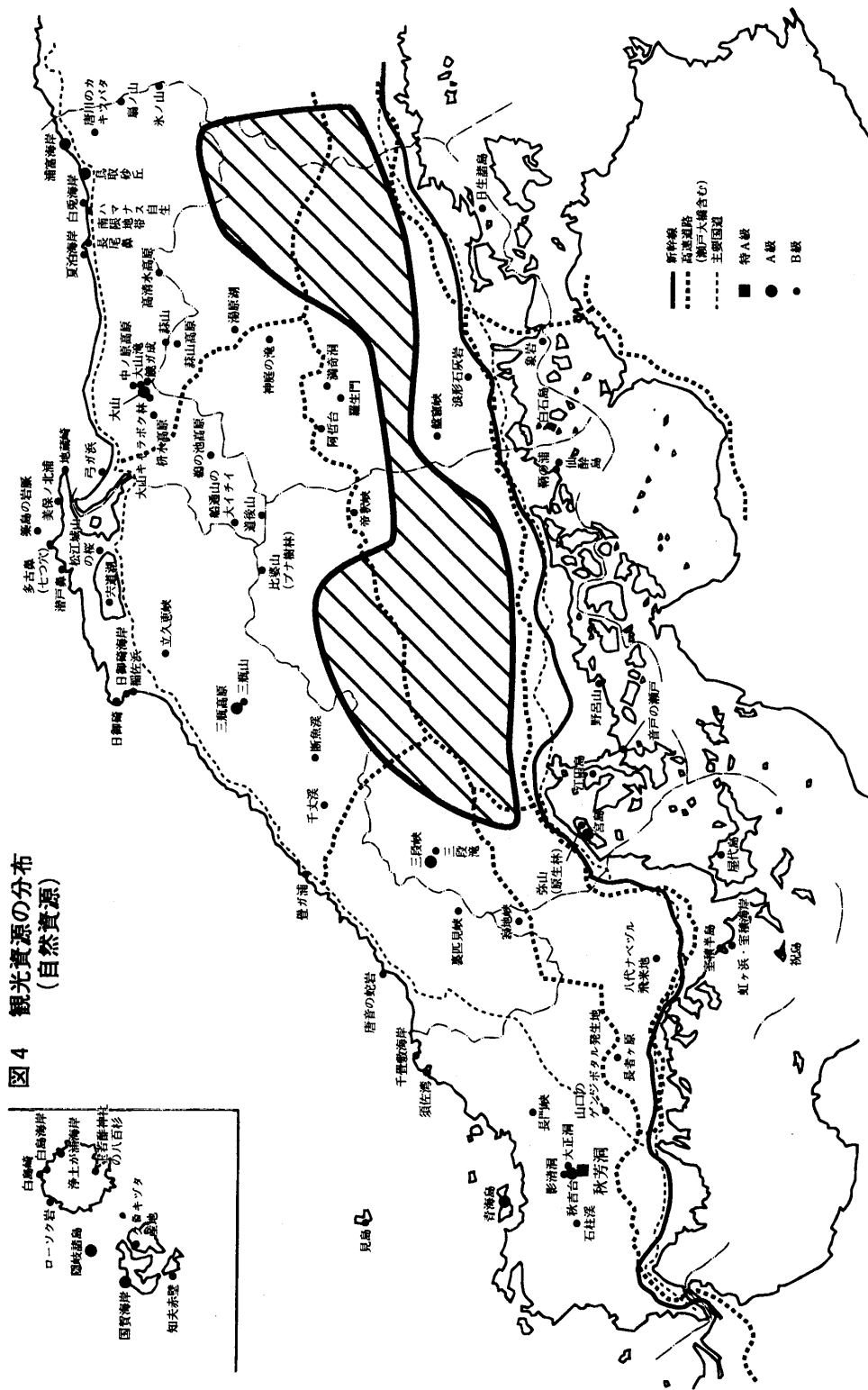


出典：中国産業活性化センター編（1994）、『中国地域の観光ネットワーク構想調査報告書』
中国産業活性化センター、P.34より。



資料：資源評価 (財)日本交通公社

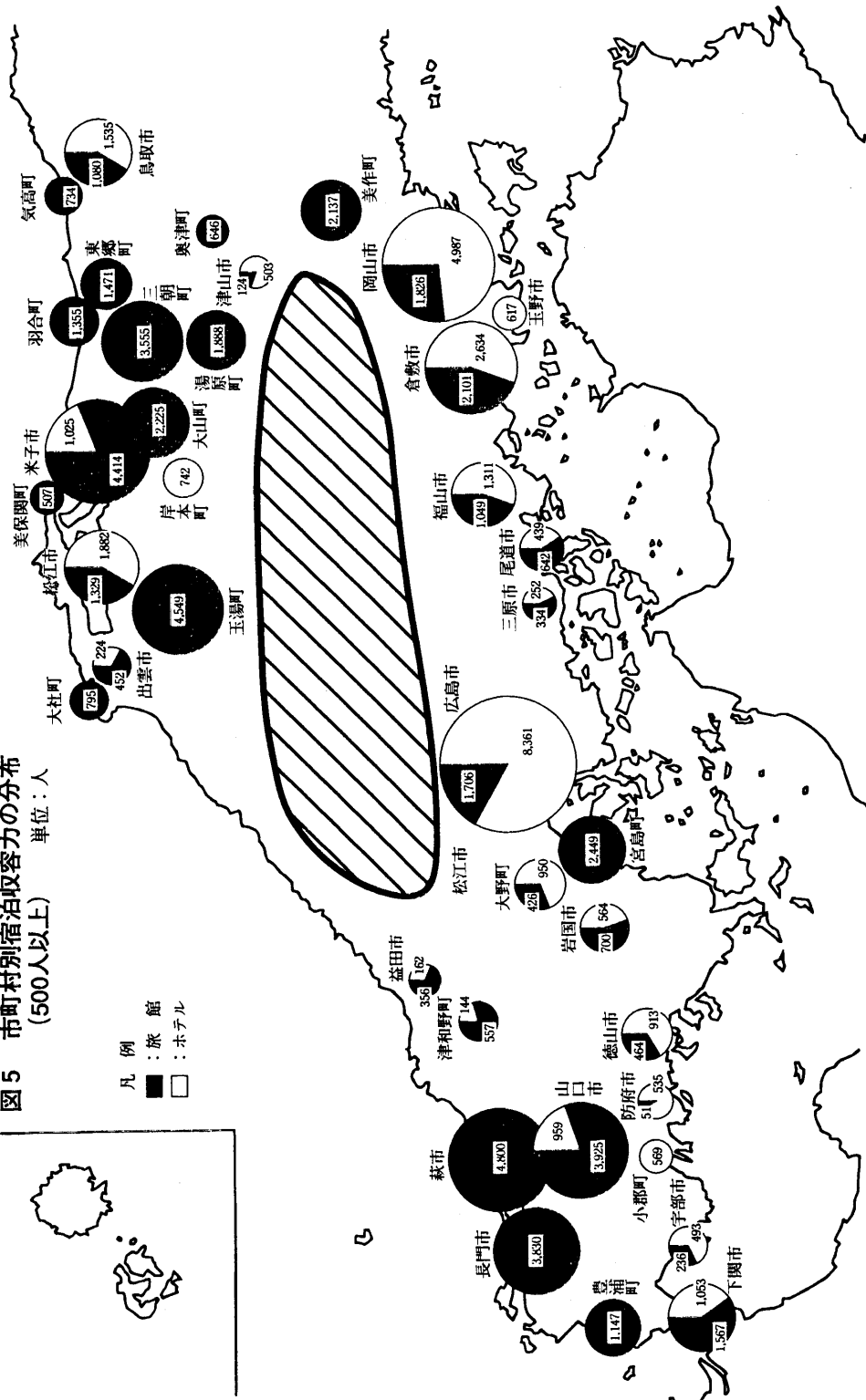
図4 観光資源の分布
(自然資源)



出典：中国産業活性化センター編 (1994)、『中国地域の観光ネットワーク構想調査報告書』
中国産業活性化センター、P.14より。

資料：資源評価 (財)日本交通公社

図5 市町村別宿泊収容力の分布
(500人以上) 単位：人



出典：中国産業活性化センター編（1994）『中国地域の観光ネットワーク構想調査報告書』

中国産業活性化センター、P.19より。

資料：ホテル'92日本ホテル年鑑
 旅館一日本観光旅館連盟加盟会員案内
 平成4年度版（前掲）

が大きな古い農家を買収してそこで個人で経営を始めたエコミュージアムがありました。それは宿泊もできるようになっていて、現在は政府の援助を受けて、まさにエコミュージアムとして活動をしている重要な施設でした。そこで何をしているかという、小学校の子供たちがキャンプに来て周辺の自然を勉強します。指導するのはエコミュージアムの経営者ですから、先生方は付いてきて子供の面倒をちょっと見ているだけでいいわけです。日本の先生が困っているのは、生活科とか環境問題を教えるのに、自分に力がないということです。自分がそういう訓練を受けていないし、それをやるには、やはりこうしたエコミュージアムというような施設を各市町村レベルでつくっていく必要があります。内陸部は環境を勉強するには非常にいい場所ですから、そういう所を活用するわけです。キャンプもできれば公園もあるというような所をつくっていく必要があるのではないかと思います。

これが第1の提案で、もちろん同時に併設して、例えば、それぞれの市町村で歴史民俗資料館を全市町村がつくり上げるべきだと我々は考えています。その町の歴史、それからどういう生活のパターンがあったのかというのを展示すれば、これも学校教育と連携できて究めて有効な施設になってくると思います。このように子供を鍛えることによって初めて、子供が成長した時にさらに違った価値を求めて何処かに旅をするという気持ちも育っていきます。そういう長い目で見た観光産業といえますか、観光行動の育成という点を考えてもいいのではないかと思います。

第2の提案は観光ボランティアガイドです。日本では年配の方々がやっているようですが、これはむしろ大学生とか高校生とか若い人が5～6人でグループをつくっても構わないわけですから、土日を利用したり休日を利用したりして、都市から農村にレジャーを求めてやってくる人々の町案内をする、そういうボランティアガイドを育成することが今後の課題だろうと思います。それで農村部も活性化できるチャンスを十分に掴み得るわけです。この例はもうすでに運輸省などの事業で部分的に行われていますので、成果があちこちの資料で出ています。

第3番目が観光案内所のきめ細かい配置です。最大限に希望すれば、外国人が一人で歩ける案内図の工夫です。外国人が一人でその町にやってきていろんなことができ、見て楽しんで帰れるということを考えなければいけないと思います。これはもちろん外国人に分かるということは、我々日本人が行っても分かるようになっていなければいけないわけですし、そういう工夫が絶対的に日本では足りません。これは日本人は田舎的民族だということで、イギリス風に Don't mention it の国民だと言っています。アメリカのように You are welcome の国民ではないということです。つまり日本人は知っている人は知っていればいいんだという思い込みがあって、自分達の村に来てくれて知っている人がただ見てくれればいいんだと、知らない人はほっておけばいいという認識が非常に強いわけです。これはイギリス人も同じですが、「ありがとう」と言えば、「いやそんなことは言わなくてもいい」と言う。ところがアメリカではたいへんな歓迎をしてくれ

るわけで、こういう価値観の変換を我々自身が心掛けなければ、You are welcome の国にはなれないということだと思います。

そういう国になっていくということは、欧米人だけに対応しろという話ではありません。西日本ではすでに韓国・台湾の観光客が圧倒的に欧米の人々を越えています。そうすると中国地方に韓国から夫婦だけで、韓国語しか分からない人が旅をしてきた場合に、果して広島県内をどれだけ動けるかは非常に大きな疑問です。韓国語の掲示はかなり出るようになりましたが、中国語と韓国語と英語と日本語と、それくらいの観光案内の親切さがあるべきであると思います。今は是非来て欲しいと言いながら、荒っぽい加減な日本の案内が依然として続いているのではないかと思います。

今日は3つの提言をいただきましたが、このような観点で改善していくと、当地域も、今よりもまた少しは進むような、そういう観光産業の盛んな地域になっていくのではないかと思います。

3. 四国・松山から見た観光と地域連携

松水：九州地区に比べて中国四国地域は、観光の入込客が必ずしも十分に伸びていない。それを伸ばすためにはどうするかということに、いろいろご苦心いただいているお話をさせていただきました。観光客を増やすためには観光資源の新たな創造が必要で、どうすればいいかというご提案をいただきましたが、先ほどの端先生のお話ですと、地域のあらゆる物が資源になりうるということですから、これから我々の地域でいかなる資源をつくっていくのかということが重要となり、これからはそういう新たな資源づくりの競争の時代に入ることになるのではないかと思います。

引き続きまして、四国からみた観光ネットワークのあり方について奥村さんにお話をさせていただきたいと思いますが、四国の場合はご存じのように四国霊場八十八カ所巡りというネットワークのお手本があるわけです。中国地域と四国地域を結びつける可能性があるかどうかということにも触れていただけたらと思います。よろしくお願いします。

奥村：私は、道後温泉で旅館業をやっております。私一人が観光業でございますので、観光業界の立場でお話をさせていただきます。

広島に到着すると「鳴門海峡と道後温泉・宮島の旅」というステッカーを持ったバスガイドさんが観光ツアー客を迎えに来ていました。鳴門海峡の渦潮は、四国を代表する自然観光資源で、渦潮では日本一のスケールであります。道後温泉も日本最古の名湯として四国を代表する人文資源であります。宮島は歴史的にも文化的にも日本を代表する観光地であります。



四国と中国、松山と広島を結ぶ観光ルートは昔からありますが、今は人気落ちて来ております。四国の観光資源はA級が少なく知名度が低いところに問題があります。人文資源でA級に入るのは金比羅と道後温泉ぐらいですし、瀬戸大橋は超A級の人文資源だといわれましたが、架橋後10年経って観光資源としての価値はあまり認められず、交通手段道路としての役割しか持っていないと思われます。石鎚山は西日本最高峰ですが知名度が低く、夏のお山開きとスキーシーズン以外観光客はありません。観光的に弱い愛媛が広島と連携しても強い力になりうるか、現状認識が甘いのではないかと考えています。

先ほど中山先生が数字をあげて詳しいお話をされましたが、私もJTBの数字で話をさせていただきます。JTBの統計で推測しますと四国の観光客は1%強、中国が3%位であります。九州が8%のシェアですので四国と中国合わせて九州の半分ぐらいの入り込み状況であります。JTBのシェアは大きいので全体の数字もあまり変わらないと思われます。ところでJTBの協定旅館ホテル連盟がありまして、全国9ブロックに別れておりますが、四国は小さいので中四国連合会として宣伝誘致活動をやっております。中四国が一つになっても全国の大競争の中で苦戦しているのが現状であります。

四国の観光業界の現状ですが、「四国は一つ」ということで、永年、行政と経済界が協調して観光事業をやって参りました。数年前の「タップ90」も四国4県でやりましたが目に見えた成果はありませんでした。「タップ90」は観光後進県を特別に取り上げて観光立県への意識改革を行うのが目的でしたが、広域でやりますと焦点がぼやけてしまいます。行政や四国経済連合会等では4県が連携して強力に事業を展開しているといわれますが、私共民間業界では馴れ合いでやったのでは成果は上がらないと考えているのが実態であります。

四国には弘法大師がつくったと言われる八十八カ所巡礼札所があります。それぞれのお寺は小さく有名ではありませんが、1番から88番まで番号をつけることによりルートができ上がりました。日本人の心の故郷と言われる巡礼の旅ができ上がり、今や四国最大の観光資源となりました。歴史的に見て四国からは坂本竜馬をはじめ多くの傑者が排出しておりますが、四国の発展のために役に立った人物は、弘法大師以後は現れていないと思われます。

約10年前に瀬戸大橋が開通いたしました。開通後3年間は四国全域が観光客で潤いましたが、現在は瀬戸大橋効果と言われるものはありません。当時、瀬戸大橋は超A級の観光資源になるとして期待されましたが、10年経った今日観光価値はあまり認められず交通手段・道路としての役割しか果たしていない現状にあります。当時は瀬戸大橋が全てで、橋に過大な期待をし、島内の道路整備や観光地づくり、まちづくりに本気になりませんでした。2年半後の今治・尾道ルートの開通を控えて、外部要因や外ばかりに目を向けて同じ失敗を繰り返さないよう心しなければならないと思っています。

ここで道後の現状について話をさせていただきます。今年の5月3日に、私は聖徳太子

の扮装で広島の花フェスティバルに参加しました。今年は聖徳太子が道後温泉に
来遊されて1400年に当たりますので、聖徳太子記念事業を多数企画し、道後温泉まつり
には聖徳太子はじめ道後温泉由来の古代から近代に到る多くの人物の時代行列を行いま
した。広島の花フェスティバルは人出の多いことで有名ですので、広島に乗り込
んで道後のPRをすることにしました。坊ちゃん・マドンナも人力車に乗せてパレード
に加わりましたので、注目されマスコミにも取り上げられ良い宣伝になりました。ゴー
ルデンウィークイベントでは博多どんたくに次いで日本で2番目の人出であったそうで
あります。まつりは本来地域の伝統的なもの、地域の人々の出演で行われるものであり
まして、他所の歴史や文化、まつりを持ってくるのは邪道だと思っていましたが、これ
だけのパレードのスケールになりますと新しくつくったまつりとしては成功していると思
います。

道後の最近のトピックスとして、地ビール「道後ビール」をつくりました。道後温泉
本館の隣に地ビール館をつくり、湯上がりビールとして売って人気が出て参りました。
各旅館でもお客様に提供し道後の新しい名物になりつつあります。温泉街のまちおこし
として地域全体での取り組みは全国でも始めてであります。11月21日からJTB主催で全
国の地ビールまつりを東京でやりますが、出品の予定にいたしております。また、道後
には子規記念博物館がありますが、新しく温泉街に美術館ができました。文化の薫り高
い温泉街づくりを進めています。

次に旅館業界の現況についてお話いたします。広島と道後温泉は古くから海の航路で
結ばれており、瀬戸内海汽船と石崎汽船で共同航路を持っておられまして、私ども旅館
と芸予会という会をつくり、芸予クーポンを発行して多くの広島のお客様にご利用いた
だいて来ました。現在、芸予会はなくなりましたが、芸予航路によるお客様は多く、広
島は道後にとって大きなマーケットであります。また広島企業が松山に多数進出してお
りますが、我々の業界でも広島資本との競争になっております。瀬戸内海汽船さんが道
後の名門旅館を10数年前に買収し、その後、黒川紀章の設計で一流旅館を新築されまし
た。屋号も道後館で地域一番店として繁盛しています。道後館が一つの刺激となって道
後で最も歴史の古い老舗の「ふなや旅館」が4年前に新築しました。私方も本年8月に新
築しました。道後館のオーナーは瀬戸内海汽船の会長で、有名な文化人です。文化の薫
り高い宿を造りましたので、私も地域の伝統文化を継承する宿として能舞台を4階ガー
デンに造りました。松山は、俳句と並んで能楽の盛んな街で、夏目漱石も松山で謡が上
手になったといわれています。宮島の能舞台にはかないませんが、西日本では一流だと
お褒めの言葉をいただいています。能楽以外にも使用して、道後の芝居小屋として町お
こしに役立てて参りたいと思っています。私事を申し上げましたが、今治・尾道ルート
の架橋を契機として今後両地が連携し、または競争して発展していく方策を研究しなけ
ればなりません。

観光行政では、第一番目に広域観光ルートをつくることを主張されますが、私はまず

は、それぞれの地域を魅力的にすること、観光資源を大切に、伝統文化を経承して、まちづくりに力をいれることが先であると思っています。価値があるところには、自然と人が来てルートができるのであります。四万十川は、東京では四国で最も有名で、道後へ泊まり四万十川を見て、高知へ泊まるというルートは、自然にできてきました。今治・尾道ルートには10くらいの島がありますが、橋が架かれれば全ての島が潤うことにはならない、魅力的な島しか人はいない、大変な競争になると思います。相乗効果を否定するものではありませんが、はじめに広域ルート・連携ありきではなく、まずは拠点主義でいくべきだと思います。尾道は文化のレベルの高いまちですが、今治は商工業都市で観光地としては弱いまちです。通過都市になるとの心配がありましていろんな取り組みをされていますが、この度、四国一の高層ホテルが完成いたしました。中四国を代表するような立派なホテルです。アーバンリゾートホテルとして売っていけば、今治市に観光客を呼び寄せることになる可能性があります。いずれにしても、尾道と今治は大変な競争になると思います。

道後としては、広島との競争に負けないように今治と協調連携して参る必要があります。架橋を契機として広島と松山が連携して観光の力をつけ全国との大競争、アジアとの競争に勝よう努力するとともに、相互に競争して魅力的観光地づくりに努めて参らなければなりません。

松水：中国地域と四国地域を合わせても九州の半分の観光客しかないということで、当地域はもっと頑張らなければいけないわけです。さらに関西というのは歴史的にも文化的にもいろんな観光資源を持っていて、歴史・文化ということになると、日本で最も多くの観光資源をお持ちの地域ではないかと思います。

明石架橋ができれば、関西方面のお客様を四国に呼び寄せ、さらに四国に来た観光客を中国地域に呼び寄せるというルートができることが望ましいのですが、日本国内だけでなく関西国際空港で世界のお客様を、とくにアジアのお客様を呼び寄せることも考えなければいけないのではないかと思います。最近では東京に仕事で行ってビジネスホテルに泊まっても、韓国とか台湾とかフィリピンとか、日本人と顔形は変わらないので、日本人かなと思うとどうもアジアの方だったりするケースがあります。東京ディズニーランドができた影響が出ているのだと思いますが、関西地区では聞くところによると、ロサンゼルスユニバーサル・スタジオがテーマパークとして開業するという話も聞かれています。当地域の場合はチボリ公園が近々倉敷に開園されますが、全体としてはどうも観光資源に乏しいのが弱点のようです。

非常に観光資源の豊富な関西の方から見られて、この中国四国地域をどのようにご覧になっているか、白幡先生にお願いいたします。

4. 地域活性化の視点で観光を考える

白幡：今日は「地域経済研究」の場に呼んでいただきましたので、そういう観点から何か意見が言えないかなと考えてきました。ちょうど端先生の講演で、会場に女性がありませんという話が出ていました。どんな御意見かと聞き耳を立てましたが、穏やかなお話でした。見渡すと私と同年輩かあるいはもう少し上の「おじさん」ばかりおられるようです。地域経済とかいう話になるとどうもおじさんしか出てこないようですが、ところが今日の話は「文化経済」です。端先生が新しく提唱されて意味を明確にさせていただいたわけですが、文化経済になると働き盛りの男だけでは処理できない問題で、もっと広い目で見ないとだめではないかと思えます。会場に女性がいらないから不満を言っているのはありませんが、地域経済と観光を男だけで考えると何か堅くなってしまう。せっかく観光・文化を考えるのですから、年齢幅も広げて多様な意見を取り入れる必要があるし、それからお金をよく使うのは若い女性だということもあります。そういうことを考えますと、従来の地域経済に対する考え方そのものも、大げさに言うとパラダイムを転換しなければいけないという感じがします。



私の研究所でも若い女性にアシスタントとして来てもらっていますが、どこかに旅行に行くとなると、私などとは観点が違います。「貴方の収入でなんでそんないいホテルに泊まるの」とおじさんは思ってしまいましたが、「いいホテルだから私は行くんです」と言います。我々はそんなお金があったらもっと晚にお酒が呑めるよと思うわけですが、いいホテルに泊まるために行くんですよ、楽しみに行くんですよという話です。私は1万5千円を越えるとかかなり贅沢だと思いますが、彼女にしてみれば2万円のホテルだからこそお金を出すんだということです。ハウステンボスに行っても、ど真ん中の一番いいホテルに泊まったそうでして、貧弱な安いホテルに泊まって何が楽しいですかと言われちゃうんですね。そこで騙されたと思って、私もハウステンボスで高いホテルに泊まりました。高かったのですが、確かに快適は快適だと思いました。彼女たちに教えられたわけです。つまり私一人が考えつくような観光の観点というのは、ある種の世代に束縛された考え方です。観光およびそれを取り巻く文化的な人の流れを考える時に、単に若い人だけでなく、世代により非常に幅のある欲望・要望を取り入れなければならないという感じがいつもしています。

こうした視点で観光を考え、3つほどにまとめてみたいと思います。一つは外からの目ということです。別の言い方をすると異文化の視線を大事にしなければいけないと思えます。第一に歴史的に見た瀬戸内海地域を例にとりましょう。近代でいいますと、日本が開国して外国人が蒸気船でやってきました。長崎から関門海峡を通って横浜に行く

時に必ず瀬戸内海を通りました。そして瀬戸内海を通るとき、ここはエーゲ海に負けない多島海であるということを、多くの外国人が見聞記に書いています。素晴らしい景観だということで、外国人の目による評価によって有名になり、瀬戸内海国立公園が生まれました。日本で最初にできた国立公園のひとつです。最初に3か所、瀬戸内海と日光と雲仙国立公園ができました。とにかく第一に国立公園に指定された瀬戸内海と日光というのは、これは異文化として外国人が評価したためです。元々日本の観光行動の中で、確かに日光や瀬戸内海は注目されていましたが、それを世界的な価値だということで、異文化からの評価という価値観がそこに乗っかることによって、さらに人の目はそこに向いたと言えます。外からの目、異文化の目というのは、外国人に限りません。私は京都にいますが、そこから見て、ああこの地域のこんな所がいいなと思うことが多々あります。住んでいる人達は気づかないということを言われましたが、そういう価値を見つけるのにいろいろ議論しても駄目で、よそから見た異文化的視点をうまく見つけ出すというか取り入れることが大事だろうかと思います。それはつまり、よそにないという価値だと思いますが、変わっているとか珍しいとかいうことだけではありません。しかしこの姿勢を持つのは案外難しいことだろうと思います。これはまた後ほど議論の中でお話したいと思います。

第2番目に、歴史とか文化の視点をとるとき、どうしても過去を考えがちですが、歴史・文化はやはりつくるものであるということが言えると思います。元々あるものも注目を浴びなければほとんど価値がないわけですから、これは発掘という作業になると思います。歴史や文化というものはつくるものだということです。京都は観光で何にも努力してない「立派な」町だと思います。人が来ても愛想の悪い、これで大丈夫かと京都に住みながら思いますが、しかし全国から人が来ます。この理由は物語性というか、嘘でもいいのですが、何か物語りを秘めたものがいっぱいあるからでしょう。常日頃つくられているわけで、若い人がけっこう京都に行けば中世の怨霊や妖怪が体験できるんだという話をしていますし、だから行こうかという我々から見ると変わった人も大勢います。神社なども単に御利益ということだけでなく、別の意味付けが発生します。そこは誰々の怨霊にかかわる場で、どんな故事があつてとか、そんな誰も知らないことを私は知っているから見に行くんだというような、そういうことがあります。京都の歴史や文化は1200年間営々と虚実取り混ぜた物語がつくられてきてでき上がったものだと思います。それは観光客のためにつくったわけではないのですが、それが観光資源になっています。

3番目に「快適さ」ということが必要だと思います。快適さというのは先ほどの若い女性の言ういいホテルに泊まりたいという快適さではなく、暮らしている人間が快適だと思ふ価値観を手放すことはないだろうということです。戦後は「より良い暮らし」が我々の人生の目的であり、仕事をする目的であり、社会生活を営む目的であると言われていました。これは端先生のおられる民族学博物館の最初の館長の梅棹さんがずっと言われていたことです。日本の戦後の価値観はより良い暮らしだった、それを達成するた

めにあらゆる分野の人間がいろんなことをしてこまできました。より良い暮らしというのは「物」だったわけです。機能性みたいなものです。機能性を満たすような物をいっぱい身近に持つことができたなら、これはより良い暮らしだという考え方でした。今はどうもそれはだいたいある。いや十分にあるのです。そこに何か違うもの、自分にとって快適だと思える物、価値観のフィルターを通した物が求められているのではないかと思います。それは地域の暮らしの中で、やはり広島が暮らし良いというのを、それを人がどうこう言うから手放すということでは、その地域にある独特の物、よそにない物を結局失うことになるわけです。価値の単一化ということではなく、やはり多様化の中で考えられた上での快適であろうかと思います。以上3つの視点、異文化的な視点で考えることと、歴史と文化はつくるんだということ、それから快適ということを忘れて、観光客を呼んだり、あるいは地域経済の活性化を文化的に行うことはできないように思います。

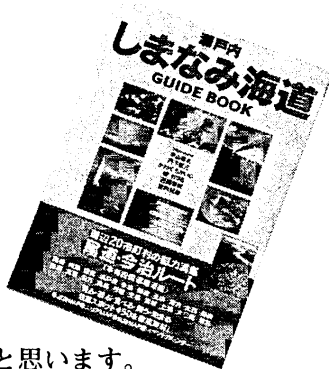
よそと違う物、異文化の視点をちゃんと取り入れた上で、自ら歴史や文化をつくり上げていく中で、なおかつ快適にやっていくというのは、変わったものとか珍しい物とか人目を引く物をつくるだけではないという例を一つだけあげたいと思います。私はよくイギリスに行きます。私の元々専門は庭園とか公園とか都市計画ですから、レンタカーを借りて、よく都市・田舎巡りをします。各地を巡るんだから、我々はレンタカーを借りようという発想になるのですが、イギリス人の楽しみの中に運河巡りというのがあります。ちょっとお金ができると自家用船の時代なんです。車を持っているのは今では常識でして、それでドライブをして家族旅行というのは、機能性というか誰にでも与えられるような楽しみ方ですが、イギリスの場合は平地で川が平らで運河が張りめぐらされていますから、自家用のヨットやボートで全国を廻れます。気に入った町のあたりに留めて、そこで降りて都市観光をしてもいいし、岸辺ですから家族で遊んだりして、あまりばたばた見て廻るという観光ではなく、非常に優雅な遊びです。

これが日本に定着するかどうかは別問題ですが、よその人が求めてつくり上げたのではなく、彼らが自分にとって快適であるという視点に立って、国内にある元々の資源を利用したものです。水上交通というのは今では遅れた交通機関ですから、大量の物資を運ぶかつての物の中心の時代には確かに役に立ったけれども、イギリスにおいて自動車が出た頃には忘れられたものでした。けれども、自分たちにとっては快適だという連中が、いつまでもこれを保持し続けたわけです。そこで全国を船で巡ることができる装置がちゃんと残されることになりました。そして今では多くの人がそういう楽しみに気づいたわけです。日本人で、最近、『イギリス運河巡り』という本を書いた人もいます。運河巡りの観光はよそから見た視点で自分たちを変えたり、他の人も使っていて便利だから自分も高速道路で突っ走ろうというのではなく、自らもっている資源へのこだわりがしつこかったせいで残ったものでしょう。それがあつた種の価値の多様化の中でプラスに転化していったわけで、これは単に快適を、あるいは異文化の視点というものを単純に考えないで、よそからの価値観だけで自分達の暮らしにとっての快適さを

簡単に手放さなかったことが、実は新たなプラスになったということです。

観光への心構えを議論すると「すべき」という考え方が多いのですが、むしろ「望む」「したい」という観点が、観光を地域の活性化の視点から考える時に大事ではないかと思います。私は若い女性たちの、「高いホテルだけ泊まりたい」といった「望む」「したい」という気持ちをうまく取り入れることが、今後、大事ではないかと思っています。

松水：最後に運河巡りのお話がありました。当地域の瀬戸大橋の場合は一気に四国まで渡ってしまうわけですが、西瀬戸自動車道の場合は島巡りができる環境になっています。最近、西瀬戸自動車道は「瀬戸内しまなみ海道」という愛称が決まったようですが、ここに同じ名前の『瀬戸内しまなみ海道』という本がありまして、島巡りのためには無くてもならないものだと思います。各島にどういう観光資源があって、どういう名物があるのかが掲載されていますので、西瀬戸自動車道を通して四国に行きたいという人は、こういう本を参考にするといいのではないかと思います。聞くところによると、この西瀬戸自動車道は、尾道から今治までの高速料金が少し割高になるようですが、途中の島で高速道を降りても、各島でいろいろ見学なりリゾートを楽しまれても料金には影響しないとのこと。むしろ島で観光を楽しんでいた方が有利になるような交通料金の体系を考えているということです。



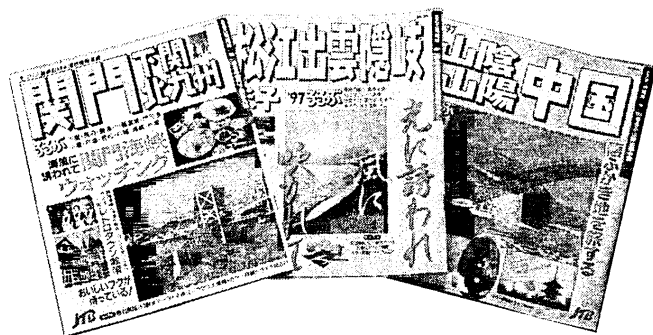
全国的にいろんな観光資源を利用されているケースをよくご存じのJTBの斎藤さんの方から、全国における中国四国地域の位置づけを中心に、ご助言をいただきたいと思っています。

5. 文化運動としての観光振興

斎藤：「瀬戸内しまなみ海道」の話がでましたので、手前味噌になりますが、関連のるぶ情報版についてご紹介します。先ほど中山先生から『るぶ山陽・山陰・中国』のお話がありましたが、実は、『るぶ尾道・今治・福山』というのも出しています。現在発売中のものは第2号で、第3号も計画しています。今日は、奥村社長も道後から来られていますが、「道後・松山」というのも2度出しています。第1回は道後温泉の本館ができて100周年記念の時です。その年の秋に松山自動車道が川内ICまで開通したのですが、その頃からかなりの渇水になりました。実際には道後温泉自体は水に困ったわけではなかったのですが、渇水報道のためにお客さんが減ったので、てこ入れに今度は「松山・道後」というタイトルでつくりました。ちょっと宣伝めきますが、この、るぶ情報版シリーズは、年間約100点、実際の部数で1,000万部強を販売しております。

他に中四国地方でいうと、出雲市で何かできないかという話がありました。出雲とい

う地名はとても強いのですが、出雲大社が出雲市にあるわけではないしちょっと難しいことになり、最終的には「松江・出雲・隠岐」という本になりました。その後、鳥取県の米子市も一緒に入りたいということで、正式書名は『るるぶ松江・出雲・隠岐・米子』になりました。最近では、明石海峡大橋開通への布石として、今年の7月に『るるぶ淡路島』を淡路島の1市10町だけでつくりました。それから「萩・津和野」です。他社でも出していましたが、これは石見空港の利用促進のために欲しいということになって、つくらせていただきました。



一番新しいところでは、『るるぶ関門』があります。サブタイトルは「北九州」と「下関」で、収録範囲としては福岡県側が全部で12市町、山口県側が5市町です。これまで海峡サミット等に参加するときは、それぞれ下関（関門）、北九州（関門）という表記をし、ある程度緩やかな共存関係あるいは協力関係を保ちながらやってこられたようです。これからは、何だかんだ言いながら最終的にはおらがとこで、下関に来れば北九州側に廻らなくてもいい、北九州だけ来てくれれば下関側に行かずにそのまま福岡に行って帰ってくれていいというのはやめよう。まず関門ありきでやって行きましょうという明快な意志表示です。北九州市はかつては日本の重工業を支える都市でしたが、今は産業構造に陰りが見えてきました。その中で、文化政策として門司地区の古い建物などを中心に、新しく「レトロ門司」というイメージで売り出そうと力を入れています。下関の場合は神代の時代から日本の表舞台にあり、戦後の引揚時まで、あるいはその後もずっと日本の表舞台でした。しかし、最近は千数百年振りに表舞台から姿を消しているような状況です。その中で、観光に目を向けはじめたわけです。これまで蓄積されてきたいろんな資源で自分達が気が付いていない物もあるだろう。歴史的な物も含めて見直して行こう。そういう潮流の中で、精神的な運動も大切ですが、何か対外的にアピールするのにいいものはないかということになり、『るるぶ』をつくらせていただくことになったのです。

るるぶ情報版は、県別のもの、九州全体、四国全体といった広域のもの、今お話しした狭い地区のものとかかなり出しています。当初は大正時代から連綿と連く文化・教養的な観光資源を中心にした、旅行案内書の隙間を埋めるものとして作りはじめました。寺

や神社へお参りするには従来のものでいいのですが、ただそこに行った時に、せっかくだから美味しい物を食べようということになると、別のガイドブックが必要になってきます。下関に行くとフグを食べようということになりますが、それまではどこに行ったらいくらで食べられるかという情報があまりありませんでした。その隙間を埋めるためにできたのが情報版です。

そういう仕事に携わっている者として中国地方あるいは四国地方を見ると、かなり印象の薄い所です。観光地名を挙げろと言われると、いくつかは挙げられますが、でもやはり九州や北海道あるいは沖縄、京都に比べると少ないというのが実情です。どうして印象が薄いのかと考えますと、やはり自然景観だと思います。北海道には知床・阿寒湖・摩周湖・富良野などがあります。九州の場合は長崎と阿蘇、桜島があります。北海道の富良野あたりの大きくうねる大地が自然かという点と違います。しかし、おそらく我々の感覚としては山間部の段々畑も自然景観です。緑であるが故に自然景観というではありません。要は都会の景観を除いた風景は全部自然なんです。日本三景にしてもやはり自然景観で、そういう意味でいうと中四国は比較的弱いのかもかもしれません。

白幡先生がおっしゃったように、確かに瀬戸内海の景観を改めて見直して、工業地帯とか余計なものを取り除いて、本来の自然の姿に戻して見る必要があると思います。あるいは四国の南の方の宇和海、山陰にも素晴らしい自然景観があるわけです。例えば布に例えると、京都などは非常に洗練された絹織物です。四国も絹織物だと思いますが、山繭を自分で紡いで織ったという感じです。一見あまり大した所ではないように見えて、よく見ると深い味わいのあるところだと思います。

先ほど中国地方の山間部には何もないというお話がありました。私もそういう印象を持っていますが、学生時代から中国地方の地図を広げ、なだらかな山がづらなり、よくこんな所に集落があるなというほど、本当に万遍なく人が住んでいるなあと感じていました。2万5千分の1の地図で見ると、どんな所にも道があって、一度そういう所をじっくり歩いてみたいと思います。そういう意味で似たような所に北上山地があります。ここも中国山地と同様に、川に沿って点々と集落が散らばっています。四国もそうですが、人々の生活が山の奥の奥までしみ込んでいます。九州もそういう所がありますが、中四国というのは、日本の中でも一番、風土と人々の生活が古い時代から深く関わって一つのスタイルができ上がっている場所のように思えます。そういう中でどういう歴史的・文化的な遺産があるかを考えてみますと、あらゆるものが文化的・歴史的な資源であり、観光資源であると言えます。これをどういうふうに見つけるかということです。

私どもは、情報誌を買って下さるであろう方々のプラスになる情報であれば、基本的に何でも載せます。例えば、高知の足摺の近くで、地元の熱心な人たちが足摺という知名度の高い観光地に、知られざる素晴らしい所があるので寄って欲しいということがありました。巨石文化の跡とおぼしきものがあるのです。先ほど物語性というお話がありました。全くの嘘ではいけませんが、歴史にはいろんな解釈があるわけで、取材をして

『るるぶ』の高知編に「知られざる巨石文化」として載せたところ、たいへんな反響がありました。そういった観光資源的なものは、とらえようによってはいくらでもころがっているのではないかと思います。富良野にしても「北の国から」というテレビドラマで脚光を浴びて、北海道の有名な観光地になりましたが、最初は何でこんな何もない所に人が来るのだらうということだったのです。



中四国を一つの地域として考え、新しい観光資源を発掘するという話がありますが、従来の観光資源も無理矢理探せば多少はあるかもしれませんが、しかし、あらかた商品化しつくされています。ですから今までと全く違った目で探すことが必要だと思います。その時に大切なのは、そこで暮らしていく自分たちにとってどれだけ価値のあるものなのかが重要で、よそ者にとっての価値は二の次です。よその人に媚びて何かをしななければいけないというものではありません。観光客や旅行業者は非常に浮気ですから、何かいいものがあると直ぐ飛びつき殺到しますが、他にトレンドイナ物があるとすぐそっちへ行ってしまう。昭和40年代にあれだけ隆盛を究めた宮崎ですが、今は観光客はすっかり少なくなりました。現在、新婚旅行の97%が海外旅行となっています。イメージ先行で新婚のお客様が喜ぶ施設をつくってマスコミが煽り、旅行業者もそれに乗り、経済状況もよくなり、熱海よりは南九州の宮崎ということになって伸びたわけですが、今はご存じのとおりです。自分達が必要としないものを、そういう浮気者のために今さら文化資源として無理に発掘する必要はないわけです。それが脚光を浴びることによって自分達の生活が豊かになるものであれば、その後観光客が来なくなっても十分に文化資源として残っていくと思います。

それから広域観光とか、中四国地域の機能分担ということですが、明快な設計図をつくるのは難しいと思います。分担という明快なシナリオをつくれれば、やっぱり「おらが村」ということになってきます。いろいろ自治体とか市町村にお邪魔すると、周辺と協力してやっているが、最終的には自分の所にだけは来て欲しいとなります。100%本心ではないと思いますが、決して嘘ではないと思います。行政や教育委員会の中にはどんな専門家よりも地元の文化財に詳しい方がいらっしゃいます。そして当然自分たちのいい所を見てほしいと思っています。逆に言えば自慢したいということです。よそから認められることによって、ある意味では自分の土地に誇りを持てる。ということは、今生きている自分にも誇りをもてるということです。そういう自分の土地に誇りを持ち熱意のある所どうしが何らかの形で結びついていて、さらに他の人達がついていくという形で、周辺にネットワークが広がる可能性があるのではないかと思います。その場合、いろいろなレベルの結びつきが考えられますが、そういう形がこれからは理想的ではないかと思います。

まだまだ知られていない地域の結びつきはたくさんあります。香川県の栗島に行った

時にたまたま昔瓦を焼いていた小さな窯元がありました。ここで焼いてどこに使うのか、丸亀あたりだろうかと思っていたら、一番たくさん送ったのは中国山地の山奥の方だということです。また、高知県の山奥に行った時にちょっと変わったお茶を出されました。自然に生えているお茶を使っていて、だいたい自家消費するそうです。しかし、粟島の隣の志々島という平均年齢の高い島で、そこのご老人達は、今でもそのお茶で茶粥をつくっているということです。そういうふうには四国山地を越えて海を越えて今でもつながっているということがあるのです。そういったつながりはまだまだいくらでもあるでしょう。

観光業というのは決して儲かるものではありません。これからの観光は文化運動だと思います。自分達の生き方を通して考えていくものだと思います。自分達がつくっている本を観光文化の創造にどういかしていけばいいのか、美味しい物と安く買える物、楽しく泊まれる所しかない本だけをつくっていていいのかなと反省することもあります。

松水：ネットワークのあり方、あるいは地域の機能分担のあり方ということで、貴重なヒントをいただきました。パネラーの方々も他の方の発言も踏まえていろいろ発言されていますので、最後に端先生にまとめていただいて、フロアからも質問を受け付けたいと思います。

先ほどは、端先生に「文化経済の時代」というお話をしていただきましたが、ここでは、文化経済の時代に観光行政がどうあるべきかについて、お話いただければと思います。

6. 文化経済の時代の観光と地域づくり

端：パネリストの皆様方のお話を伺っていると、あれも言わなければこれも言わなければと、たくさん課題が出てきました。本当は一つ一つ発言者の方々に絡むような議論も大事かと思いますが、若干言い残したことがいくつかをまとめてみたいと思います。

その一つは、文化経済の時代には、消費者は「価値観を前提にお金を使う」ことになると思います。消費者が価値観を前提に消費行動をとるということを考えますと、先ほどマーケットは多様化し分散化すると言いましたが、ビジネスを主体的にやる側としては、これは逆に「客を選択する」ということになる可能性が非常に高いわけです。ある価値観の人を自分たちのビジネスに結び付けようということになるわけですから、主体から言うと選択することになります。

実はこれは日本的ではないものでして、日本の伝統はどちらかと言うと、例えば有名な商売で正札販売というのは江戸時代の中期から行われていますが、値札を付けてその



代金を持ってきた人は女子供でも拒まない、要するにお客様は神様ですという商売です。ですから日本人は基本的にどんな商売でも客を選択するということはやってこなかったと思います。ヨーロッパは違まして、ヨーロッパのビジネスは明らかに客を選択しています。自動車会社をみても、各社つくる自動車が全部違うわけです。ターゲットが違うということです。日本は各社一斉に同じ自動車をつくって競争しますから、日本の自動車工業とヨーロッパの自動車工業は全く違う形態をとっています。それは全てのビジネスに言えるわけですが、唯一日本の中で昔から客を選択してきたのは京都のビジネスです。京都という所は「一見さんお断り」ということで、比較的客というものを選んできました。その代わりに大儲けもしないけれども細々と長くやってきたというビジネスです。そういうところで京都性というものもあったと思いますが、いずれにしても、これは日本の中では少数派でした。ところがこれからの文化経済を考えていくようになりますと、ある程度、自分のビジネスにとって相手はだれかということを選択せざるを得なくなるだろうと言えるのではないかと思います。

そういうことで、本日のテーマの観光を考えると、私はどちらかと言うと、これまでの日本社会は産業・工業を主軸に経済が動いてきましたから、どうしても観光のようなサービス系はマイナーなビジネスでした。しかしながらこれからは、人は自分のためにお金を使いますから、その一つの大きなジャンルに観光という分野で出てきます。そういう意味で、観光はこれから非常に大きなビジネス分野になると思われます。その場合に大事なことは、観光ビジネスが一定の産業としての形を取らないということでしょう。例えば観光に関わる分野というと、エージェントあるいは情報関連です。それから人を運ぶための輸送、それから人が滞在中に遊ぶためのアミューズメント、博物館とか美術館とかいろんな町の中の施設、それから宿泊・土産品と、相当な分野に渡ります。それが今の日本の産業の枠組みだと、製造業のどこかに入ったり、サービス業であったり、バラバラになっているわけです。運輸にしても情報エージェントにしても、いろんなものがバラバラになって、観光産業という形で未だ見えないわけです。観光ということを取り扱っているのは運輸省ですが、各自治体にいきますと、都道府県とか市ではたぶん商工部とかで扱っていると思います。そうすると商工部だと通産省に行けばいいのではないかと、別の形でやろうとはしていますが、通産省では全然そういうことを扱っていません。ですからそういうふうにし少し日本の構造の中で見えない部分が観光の中に取りついていますので、おそらくこれからかなり意識的に改革していく必要があると思います。

これは中山先生がおっしゃったネットワークという問題と密接に関わってくると思います。ただ地域をつなぐという問題ではなくて、その間にある輸送機関とか製造業とか宿泊とか情報とか、いろんな物がそうした観光産業として目に見える形で動いてこない、なかなか大きな渦となって出てくることは考えにくいのではないかと思います。そういう意味では、地域経済の立場に立てば、やはり「集客」という視点が取りあえずは

重要だと思います。これまでの地域づくりは企業誘致が中心でしたが、これからは集客が中心になるだろうと思います。集客の中の一つの手だてが観光であるというふうに考えています。例えば集客の中には、最近ではいろんなジャンルがありまして、広島も含めまして全国でＪリーグが活躍していますが、Ｊリーグの舞台というのは必ずしも大都市ばかりでないわけです。地方都市がこうした大きなネットワークに参入するためには、やはり大きな枠組みが必要になってきます。集客という概念が、情報と交通・通信とに守られて、移動できることが最低の条件になります。ですから、いろんな意味で集客性ということが、地域の枠組みの中で非常に重要な意味を持っています。もちろんその中には、雇用、すなわち働く場という集客も考えられるわけですが、いずれにしても集客という視点はかなり重要ではないかと思います。

ただ、その時に地域づくりの視点となるのは、先ほどから議論してきました「地域の資源」ということです。実は考えてみますと、歴史にしても文化にしても結局は人々がつくってきたものです。歴史というと何か初めから客観的に存在するような感じもありますが、先日の島根県加茂町における大量の銅鐸の発見などを見ますと、歴史というのは降って湧いてくるというようなところもあるわけでして、ああいう例を見ていると、歴史は明らかに人々がつくってきたものだということです。その土地に何かずっと歴史的なものが残っていることは、いろんな時代の人々が皆これは残そうと思って残してきたわけです。途中で誰かが残す必要がないと思ったら、もうそういうものは地域には資源として残っていません。ですから今私たちが歴史として認識できるものは、実はあらゆる時代の人達が残そうと思って残してきたことが歴史になっているということです。そういう意味では、我々は自らの力でこれからの歴史や文化をつくることが可能でして、やはりこれからは自分たちが納得いくものを創造していくことが非常に大きな力になると思います。おそらくそのように地域の人々が本当に惚れ込んで作業していると、外から見てもそれは非常に心地よい物だということになるのではないかと思います。

7. 地域づくりにおいて西洋文化の真似をどのように考えるか

松水：当地域は、来年のNHKの大河ドラマで毛利元就の放映が予定されていますので、物語性という意味では千載一遇のチャンスではないかと思いますが、当地域の観光客がどういう状況になるのか、それは地域のいろんな方々の取り組み如何によっている面も多いのではないかと思います。せっかくの機会ですから、フロアからの質問があればお願いいたします。

フロア：私は、経済と文化は車の両輪で、人間の心の中での価値観の重みにおいて、同じ大きさであると考えています。その場合に日本は、歴史的に西洋の真似をしたものは必ず叩かれてきました。ペリーが来た時から騙されて条約を結んでいるわけですし、そ

の不平等条約にたいへん苦しんだということはよくご存じのはずです。そして富国強兵をやって、太平洋戦争を戦いましたが、大東亜戦争で失敗しました。西洋の形を日本が真似をしたのでは、これからの日本での文化はきちっと立ち上がらないと思います。それで私はこのように和服を着ていますが、現在こうしてお見受けしても皆さんは洋服です。洋服で物を言っている間は、いくら経っても欧米人を越えられないと思います。価値観が勝つか負けるかしかないわけですから、民主主義、多数決というのは勝つか負けるかという論理ですから、それでは駄目だと思います。そこを越えたところが東洋の物の考え方です。したがって日本が培ってきた起承転結のある文化的な物の考え方、風土に根ざした優しい物の考え方というのを基調にした形を打ち出していかなないと、これからの観光も地域おこしも全て成り立っていかないと思っています。お考えをおきかせください。

中山：西洋の真似事では駄目だというご意見ですが、おっしゃられる点には賛成です。それは今日、いろいろな現象を東洋の価値と西洋の価値という対比で考えざるを得ないという、そういう時期にきているんだろうと思います。ただその時に、東洋の価値という中には調和という精神があるということです。この和という価値観で、文化をこれからどうつくっていくかということが、今まで我々としては対応が無かったのではないかと思います。というところまでは分かりますが、どしたらいいかというのは、未だ私自身もそこまでは考えが行っていないということかと思っています。

奥村：私事になりますが、私方は割合大きな旅館ですが、フロントも女子社員は全員和服を着て和にこだわっています。私も能をやっていますから、しょっちゅう和服を着ていますので、和を大切にしているつもりです。

斎藤：観光・歴史・文化にはいろんなとらえ方があると思いますが、あまりしかつめらしく、ネクタイをしたり袴を付けて話すようなことではないと思います。ヘラヘラして話すことでもありませんが、ネクタイをしている人もいれば、着物を着ている人もいれば、子供がいておじいちゃんおばあちゃんがいて、知識はないけれど聞いてみたいという人達が自由に話せるような場が、たくさんできてくる必要があると思います。肩肘をはったり、高い所から物を言うのは、こういった会合の中では必要かもしれませんが、本当はそうではないもっと草の根というか、地元に密着することが大事だと思います。

印象的だったのが、2～3年前、島おこしをどうしたらいいかということで声をかけていただいて、奄美大島にお邪魔したことがあります。天気がいいので、せっかくだから外でやりましょうということになり、会議室ではなく木陰でやりました。島おこしはこうすべきだという報告書を出さなければいけない時には、会議室でやった方がいいでしょう。しかし、結論を出さなくても良い会合だったので、いろんなことをお互いに

自由に話していく中で、他の人にとっては意味のないことでも、ある人にとっては重要な言葉もあるだろうと試してみたのです。それによって何か新しい企画が生まれてきたということではありませんが、のびのびと話ができ、精神的にはとても意義のあるものだったと思います。

そういった経験から考えると、今、大切なことは、西洋の考え方が東洋の価値観かといったことに拘るよりも、歴史的な資源と観光的な資源を見ていく時には、自分達が住んでいる風土が与えてくれた文化を素直に真摯に見ていけるかということでしょう。それを汲み取っていけるような感性が育ってくれば、形はいかようにでもなると思います。それが今の日本の文化をつくり上げてきているのではないかと思います。

端：実はご質問の主旨は、私のように文化のことをいろいろ勉強している者にとっては、最も本質的な問題です。赤ん坊がどうして言葉を覚えていくかというのは、やはり耳で聞いた音を真似ながら自分の言葉をだんだんつくり上げていくということなので、そういう意味では、お言葉通りにはなかなか受け取れない問題もあると思います。

私は全国いろんな所を調査して歩いていますが、例えば、九州のある山村では非常にいい蕎麦粉がとれます。しかしその食べ方を見ているとかならずしもベストとは思えない。ある時、全国の蕎麦の打ち方の交流があって、だんだんとそこで蕎麦の打ち方や食べ方が洗練されていくというプロセスもあるわけです。ですからこういう地域文化や歴史を創造していくという関わりの時には、おっしゃるように単なる真似ではいけないけれども、やはり真似ることが創造のスタートという側面もあると思います。文化というのは相互に絶えず接触して、お互いに影響を与えながら発展していくという要素が基本的にはありますので、だからそれは結局一人一人の態度の問題だと思います。

8. おわりに

松水：最後に難しい問題が出ましたが、私自身は最近インターネットでいろいろ調べる機会がありますが、地域経済研究センターですから「地域経済」ということを検索しますと0件ですということで、何も情報を得ることができません。「地域情報」で検索しますと、これはすごい情報が入っています。各県市町村レベルあるいはいろんな団体がその地域をPRする情報発信をものすごくしています。ですから、場所によっては英語の情報を入れている所もあるし、たぶんこれからはそういう地域が知恵を出して、お互いに真似するのではなく、自ら持てる資源を情報発信して招き入れる時代になってくるのではないかと思います。どうもインターネットの画面を見て、地域情報を見たらものすごい量が入ってしまっていて、もちろん日本だけではなく世界の情報も入っています。ですから、これからはやはり地域が新たな資源というか、文化的な資源をどんどんつくりだして、人を呼び込めるようなものをつくっていかないといけない時代に入ってくると

思います。そういう意味で、人真似ではなくて自らつくりだす時代になってきているのだろうと思います。

本日は、せっかくこれだけの講師の方々にお集まりいただきましたが、十分な発言をしていただくチャンスをつくることができませんでした。またフロアの方からもご質問をいただきましたが、皆様のご意見をお聞きすることができませんでした。たいへん残念ですが、今日の議論は報告書として取りまとめますので、それも参考にさせていただき、またご意見等をお寄せいただければと考えております。

本日は講師の方々を初め、会場の皆様方もお忙しい中を、地域経済研究センターの研究集会にお出ましいいただきましたことに、お礼申したいと思います。どうも長時間ありがとうございました。